

セミナー1

Ben Jonson 再読

コーディネイター： 篠崎 実 (千葉大学教授)

メンバー： 岩田 美喜 (東北大学准教授)

横田 保恵 (共立女子大学非常勤講師)

ディスカッサント： 末廣 幹 (専修大学教授)

2005年に出された最初の出版広告から遅れに遅れていたケンブリッジ版新ベン・ジョンソン全集の、2012年春刊行の告知を受けて、このセミナーを企画した。ハーフォード=シンプソンによるオックスフォード版全集の完結からちょうど暦がひとめぐりして、新しい全集が刊行されるのを機に、1990年代のその創作活動の政治性や同時代の文化への関与の検討、さらには昨今のエンターテインメントの手稿研究、ドナルドソンによる新しい評伝の出版を経たいま、どのようなジョンソン像が可能となるかを考えてみたい、との考えからだ。抱腹絶倒の喜劇作家、原理的な古典主義者、宮廷仮面劇の大成者、自作作品集編纂のパイオニア、寸鉄詩の名手、田園邸宅詩の創始者など、多彩な側面をもつこのルネサンスの巨人を、われわれはどのように考えるべきか、広い視野から討議することを目標にメンバーを募った。

当初上記4人のメンバーがペーパーを用意してセミナーに臨む予定であったが、末廣は個人的事情のためにディスカッサントとして参加することになった。当日の3名の発題内容は以下のとおりである。

『ト占官の仮面劇』におけるオランダ人表象

横田保恵

本報告では、1622年に上演されたベン・ジョンソン台本による宮廷マスク *The Masque of Augurs* を取り上げた。本作品は、前半ではロンドンの下層民が登場するアンチマスクが、後半では古代ギリシアの神や詩人による鳥占いを模したダンスが上演されるので、前半と後半の落差が指摘されるものである。

1610～20年代のジョンソンを含む様々な台本作者による宮廷マスクでは、アンチマスクの回数や作品中の位置等をめぐり、多くの工夫がみられる。その中では、本作品は、形式的にはスタンダードなものである。

本作品前半では、無断で酒類貯蔵庫から宮殿に侵入したロンドンの下層民たちにより、二つのアンチマスクが上演される。本報告では、この下層民達の中でも特にステージ・ダッチを喋る Vangoose という人物の検討を行った。彼はブリテン生まれだが外国生活を経て、外国語混じりの崩れた英語を喋るようになった人物で、ジョンソンの著作 *The English Grammar* で提示される「英語以外のネイティブ・スピーカーが英語を習得する過程」の間

逆をいく存在である。そのように多言語が混入した珍妙な言葉を話す人物が、酒類貯蔵庫というリミナルな場から宮廷に無断で流入せんとして珍妙なアンチマスクを上演し、結局は逃げ出す筋書きから、「移動」「流通」といった行為への拒否的姿勢を読み取ることは、十分に可能である。

本作品のみならず、1620年上演の *News from the New World Discovered in the Moon* (1620年)でのニュースの流通の描写や、1621年の *Pan's Anniversary*における貨幣による外部世界との取引の捨象など、1620年前後のジョンソン台本による宮廷マスクでは、「移動」「流通」への拒否的姿勢がみられる。この姿勢は、「流通を優先することにより生じる価値の縮減」への不安として理解することが可能である。

同時に、Vangooseの造形で顕著なように、これらの作品のいずれでも「流通」と関連する形で、「オランダ」にまつわるイメージがみられる。つまり、この「移動」「流通」の拒否とは、オランダの、特に東インドにおけるスペインとの敵対姿勢などを暗黙のうちに揶揄・批判するものとしても理解可能なのだ。

このように捉えるとき、オランダの対外政策を揶揄する *The Masque of Augurs* の前半と、三十年戦争におけるジェームズ1世の、特にスペインに対する宥和的姿勢を礼賛する同作品の後半は、緩やかにではあれ、しっかりと架橋されたものとして、その姿を現す。そして、その「緩やかさ」こそ、本作品の帯びる政治性の証として理解することが、可能ではないか。

『新しい宿』における女性と脱衣

岩田美喜

初演の不評が「自分へのオード」(‘Ode to Himself’)での演劇界との決別宣言のきつかけとなった後期喜劇『新しい宿、または甘心亭』(*The New Inn, Or, The Light Heart, 1629*)におけるふたりの女性登場人物の衣装着脱の重要性に着目し、ふたりの社会的変容が相補的なかたちで作者自身の階級に関する不安と希求を映しだしている可能性を論じた。

「新しい宿」を舞台に侍女ブルーデンスが取り仕切るカーニヴァル的な「恋の法廷」のゲームが奇妙な実現を見て、幼くして父、母、妹を失った(ものと思われていた)女主人レイディ・フランセス・フランプールの家族再会と主従ともどもの結婚、という結末をもつこの劇で、ブルーデンスは、宿屋というアジール空間におけるカーニヴァル・クイーンという役割演技を経て、求婚を受けて上流社会への参入を果たす。最初に彼女は、このゲームのために小柄な女主人のガウンを着ることを強制され、その窮屈さをあげつらわれるという理不尽な目にあい、それを脱ぎすてるという反逆を行なう。結局彼女のためにあつらえられた豪華なガウンが届くが、彼女は、「着服」をもくろんだ仕立屋の女房が着たために穢され、気にそまないものとなっているこのガウンの着用を余儀なくされる。彼女がその服を着て終幕を迎えることが、もともと女主人への求婚者であったラティマーの求婚を受け、持参金なしで妻でありながら「しもべ」として生きる、という彼女の境遇と符合する。プル

ーデンスの服装の着脱をめぐるこうした不自由さは、貴族の侍女という彼女のリミナルな社会的地位の不安定さを示し、作者の階級への不安を映しだしていることを指摘した。

一方、アイルランド人シェリーニエンと名乗っている、女装の少年フランク（実はフランセスの妹）の乳母（実はフランセスの母）は、登場前から豪華だが時代遅れのちぐはぐな衣裳を身につけていることが紹介され、アイルランド人の老婆という彼女のアウトサイダー性はアイ・パッチをした不気味な姿によって表わされる。ロマンス劇的な家族再会の場面で、彼女の正体の開示は「アイ・パッチを取り去る」という一種の脱衣行為によって舞台上で可視化される。この変容が、王の威光をあびマントを脱ぎ去ることによって野蛮なアイルランド人が洗練されたイングランド貴族に変わる『アイルランド人の仮面劇』(*The Irish Masque at Court, 1613-14*) の変容場面の自己パロディであることを指摘して、作者の階級をめぐる願望充足の希求を示すものであると論じた。

最後に『新しい宿』におけるブルーデンスとシェリーニエンの脱衣をめぐる対照的なあり方の並置が示す不安と希求の同居は、「自分へのオード」やチャールズ1世への賛嘆詩などの同時期に書かれた詩において、烏合の衆が集ういとわしい大衆劇場の舞台を捨てて宮廷という場での執筆によって王の権威をよりどころに自作が十全に理解されることを夢見たが、それにも確信の持てない作者ジョンソンの感覚として引き継がれることを示した。

ジョンソンとシェイクスピア～『キャティライン』をめぐる

篠崎実

シェイクスピアは「千行も削ればよかった」(*Discoveries, 650*) というジョンソンの発言には、『ジュリアス・シーザー』の「シーザーは正当な理由もなしに不当なことをしない」というシーザーの台詞が馬鹿げている(662-5)との論難がつづく。これを念頭におき、カエサル暗殺の約20年前の出来事を扱い、シーザーを劇のすみに押しやる一方、シェイクスピア劇では傍観者だったシセロを活躍させ、その演説を軸に構成されている『キャティライン』(*Catiline, 1611*)の作りを検討し、この劇がジョンソンの先輩作家への回答であると論じた。

ジョンソンは、創作に際して、3系統の材源に依拠している。カティリナ陰謀事件の同時代に書かれた2系列の材源(キケロによる演説とサルスティウスの史書『カティリナ戦記』)と、17世紀イタリアの歴史家デュランティウスによる史書『カティリナ陰謀記』である。執政官として陰謀の暴露と関係者処罰を行なったキケロの演説で利用されたのは、執政官就任直後の『農事法演説』と4篇の演説からなる『カティリナ弾劾演説』であり、彼はカエサルを処罰しなかったものの、その陰謀への関与を明言している。カエサルの称讃者であったサルスティウスの史書はカエサルの関与を否定する一方、デュランティウスは両者を参照し、カエサルの関与を認め、陰謀を未然に防いだキケロの周到さを称讃する。

ジョンソンは、三者の記述が食い違う、アルブログス族使節の陰謀暴露への関与に関しては、デュランティウスによる記述に依拠して、シセロに陰謀暴露のための手段を積極的

に指示させ、劇の展開を支配させる役割を与える。さらに、劇は、3幕以降の、シセロによる三つの50行を超える演説を軸に構成されている。これらの演説でジョンソンは、キケロの演説を周到に再構成、加工して、陰謀阻止によって救われたローマの町のイメージを鮮明に浮きあがらせる。その結果、劇は陰謀という舞台上のスペクタクルをくい止め、イメージの喚起を特徴とする言葉の劇となっているのである。こうして、シセロの執政官就任演説を聞いたシーザーの、演劇の比喩を用いた、シセロが人気とりのために「台詞を言うだけではなく、自分に都合のよい道具立てをもちこみかねない」(III. 100-1)という台詞が、シーザーの政治的かつ美学的な誤謬によって自身の書いた劇の性格を明らかにすることを指摘して、この劇がジョンソンのシェイクスピアへの回答であることを論じた。

3人による発題のあと、ディスカサントを交えて、ジョンソンにおけるキャリア形成の意味、文人ジョンソンの資質、新全集の感想などをめぐる討論を行ない、最後にはフロアーの方がたの意見もうかがった。

ジョンソンの全体像というには、初期の諷刺喜劇、成熟期の喜劇、死なども射程に収める必要があったとの反省もあるが、準備の期間も含めて、新しい全集の刊行を機に、ジョンソンを読むことの難しさと、ジョンソンについて語り合うことの楽しさを味わうことができたことが今回のセミナーの収穫だったと思っている。